



しかし我が国は、先進国と言われているが他国に比べ野鳥が少ない。野鳥も人間を恐れています。

これは、我が国の歴史的習慣が不幸な現状を生んだものと思われまします。

特に昔から野鳥をカゴで飼うという伝統が残されており、これが人々の心の安らぎ、豊かな情感を育てる事に役立ってきたことと思います。しかし、野鳥をかわいがりたいという気持は良いことと思えますが、小鳥達にとっては迷惑なことです。先進諸国では自然の中で、人間と野鳥と一緒に楽しんでいきます。

野鳥を見たら石を投げる、小鳥はカゴの中で美しい姿や声を楽しむ、というのではなく、野山の自然の中で観察するようになりたいものです。

野鳥達は害虫を沢山食べ、森林や農作物を守っています。ところが近年、我が国では小鳥が非常に減少しています。その原因は森林や湖、沼等の開発が進み、小鳥の食べ物や住みかが減った為と言われます。

このまま放置すれば野鳥は年々減少してゆくものと考えられ、心配されます。そこで私達は、野鳥の住みよい環境を作り増加するようがんばりたいものです。法律で野鳥を獲る時は環境庁長官や県知事の許可が要するように定められており、野鳥の繁殖期である四月から七月までは許可もしいことになっていきます。野鳥を飼うには先づ捕獲が必要です。

野鳥保護と飼育について

自然保護思想も年々向上し、環境づくりが全国的運動に発展して参りました。よく言われるように野鳥の多い国は、文明が進んでいる国とも言われ、半面文明が遅れている国とも言われています。後進国は、開発が遅れており、先進国は、環境の保護が進んでいることから、このようなことが言われております。

が、手続きは県事務所林務観光課で捕獲許可の申請をして許可になったら捕獲し、捕獲したら、再び飼養の申請をし、許可を得て養うようにしなければなりません。

このような飼育の手続きがまだ済んでいない方がおられたら県事務所林務観光課に相談して下さい。

又、山野で無許可の捕獲者を見受けられたら、是非、係までお知らせいただくようご協力をお願いします。(自然保護課)

公給領収証を

受け取りましょう

料理飲食等消費税は、旅館に宿泊したり、飲食店やレストラン等で飲食したとき、その料金に一〇パーセントかかります。この税金を店の経営者が、県にかわって受取ることになっております。

また、店の経営者がこの税金を受取ったときは、その「しるし」として領収証を渡すことになっております。この領収証を公給領収証と呼んでおりますが、この公給領収証を皆さんに渡すことによ

て、税金に対する理解を深めてもらい、店の経営者が税金を受取りやすくするとともに、県に適正に納めていただいたこととなります。

◎なお、公給領収証を交付しないことがありますが、おおむね、次のような場合です。

- ① 旅館における宿泊の場合は、一人一泊四千円まで、飲食店やレストラン等の場合は、一人一回の料金が二千円まで(免税点以下)。
- ② デパートの食堂のように、料金が前払制となっている場所で知事の指定を受けた店など(区分経理食堂指定店舗)。
- ③ 県が発行する公給領収証のかわりに、私製の領収証を使用することを認められている店で、この私製領収証に県の検印を受けたものを使用している店(私製領収証使用承認店舗)など。

公給領収証を受け取っていただき県の重要な財源の一つでもある料理飲食等消費税の徴収確保にご協力をお願いします。(税務課)

民話



たぜんさんのから泳ぎ

阿蘇郡一の宮町宮地 高橋 佳也

宮地のはずれに、たぜんさんという人が住んでいた。お人好しであわてんぼう、そしてお酒には目がなかった。財布がカラになってしまいうまで飲まない気がすまない。

「あんた、また飲んできたつね。うちのもんはみんな心配しとっとに……。」 おかみさんが泣きじゃくると、その時は、もう決して飲まないから……と約束もし、飲んだ事を後悔するのだが、働いて、少しお金がたまると、もう矢も盾も

たまらず町の飲み屋に足が向いてしま

う。今夜は久しぶりに飲んだので、すぐ酔いが回ってしまった。

「はよう帰らんと、またうちの悲しそうな顔をするばいな。」

そう思っ外に出ると急に雨になった。急ぎ足で町中を通り抜けると川の水が増水で、渡れなくなってしまう。

「山はそうとうに降ったらしい。よし泳いで渡るぞ。」

無我夢中でむこう岸にたどりついた。岸には上って見ると雨はすっかりあ

がって河原には赤々と火が燃えている。「こりゃあ、ありがたい。」

ぬれた着物をかわかし、体をあたためると家へ帰って来た。

「やれやれ、大変だった。」 と、おかみさんに、大水のことを話すと

「雨なんか降りまっせんでしたばい。」 たぜんさんはしきりに首をかしげた

が、たぜんさんの行動に出会った人の話は、こうだ。

「たぜんさんはそば畑の畔から、川にとびこむようなかっこうで抜き手をき

って畑をよこぎると、こんどは椿の花のかき寄せの上に着物や手をかさした

り、月の光の中でなんさま異様な気持ちでしたすばい。こりゃあ、ほんなこ

つキツネにでも化かされとったんじやなかでっしゅか……。」

もっごう

出張で地方都市に行くことがよくあるが、何時行っても感ずること

は、どこの都市も同じ顔をしている

ことである。

近年、都市開発が進み、どこに行っても同じような都市が出来上りつつある。

他の都市と同じような、ビル・アーケードのある商店街、全国同じような屋外

広告物、店頭におかれている商品、又それ違う人達の服装どこをみても全く同じである。

地域の格差がなくなったことは悦ぶべきことかも知れないが、寂しく感ぜられて仕方がない。

かつて、日本の都市には、東北は東北らしい、九州は九州らしい顔があった。

それぞれ地域の味があった。

先月金沢の町を歩いていたら、近代ビルに挟まれている木造の日本家屋がふ

と目についた。古いが、何となく風格のある、どっしりと落ち着いた感じの家屋である。

手許にあるパンフレットで調べてみると、「旧藩の薬種屋」とある。

私は何故かホッと心、の温まる思いがして、昔ここに出入りしたのである

う、江戸時代のちゃんこ、丸籠すがたの人々を思い浮かべながら、その家屋の前に暫く立っていた。



(T・O)